中国における穴性の歴史と論争

History and controversy on the Property of Acupoints in China

井ノ上　匠
Inoue Takumi

東洋学術出版社，千葉，〒 272-0822　市川市宮久保 3-1-5
TOYO GAKUJUTSU PUBLISHER Co.,Ltd., 3-1-5, Miyakubo, Ichikawa, Chiba 272-0822 Japan

要旨

針灸の弁証論治は，「理・法・方・穴・術」の一貫性をもった治療システムだといわれる。そのなかで穴性は，弁証結果を治療に結びつけるうえできわめて重要な要素となる。なぜなら，針灸治療において腧穴の効能を把握しておかなければ治法に対応した治療が成り立たないからである。穴性概念の誕生によって，針灸の弁証論治システムは整合性のあるものになったといえるだろう。

しかし，穴性を生み出した中国では，穴性を記す書籍は数多く出版されているものの，その記載内容は一定しておらず，統一教材には未だに穴性が明記されていない。そのうえ，1990 年代以降，穴性に対して否定的な見方を示した論文が散見されるようにもなった。これはいったいどうしたことであろうか。そもそも穴性とは何なのだろうか。

そこで本稿では，①穴性の定義，②中国における穴性の歴史，③中国で繰りひろげられる穴性論争の３つについて概説する。

つまるところ，穴性論争とは腧穴の効能をどう表現するか，という問題である。腧穴の効能を把握することは，教育上でも臨床上でも有益であることは論を俟たないが，針灸臨床に合った腧穴の効能をどう集約し表記していくべきなのか，今後の研究・討論に期待したい。

キーワード：穴性，薬性，羅兆琚，特定穴，穴性論争

緒言

針灸の弁証論治は，「理・法・方・穴・術」の一貫性をもった治療システムだといわれる。そのなかで穴性は，弁証結果を治療に結びつけるうえできわめて重要な要素となる。なぜなら，針灸治療において腧穴の効能を把握しておかなければ治法に対応した治療が成り立たないからである。穴性概念の誕生によって，針

灸の弁証論治システムは整合性のあるものになったといえるだろう。

しかし，穴性を生み出した中国では，穴性を記す書籍は数多く出版されているものの，その記載内容は一定しておらず，統一教材には未だに穴性が明記されていない。そのうえ，1990 年代以降，穴性に対して否定的な見方を示した論文が散見されるようにもなった。これはいったいどうしたことであろうか。そもそも穴性とは何なのだろうか。

そこで本稿では，まず穴性の定義について述べ，さらに中国における穴性の歴史，中国で繰りひろげられる穴性論争について概説していく。

1．穴性とは何か

1－1．穴性の定義

「穴性」とは腧穴に具わる性能を指す[1]とされるが，同じ意味で使われている用語には「効能・功能・功用・穴義」などがあり，表記は一定しておらず，またその定義も定まっていない。さらに，針灸の「統一教材」（高等医薬院校教材）では 1961 年に出版された第 1 版[2]から現在[3]に至るまで，穴性が記されたことは一度もない。

ただ，1990 年代半ばに出版された針灸辞典において，穴性の項目が設けられている。1996 年に出版された『実用針灸学詞典』[1]では，「腧穴に具わる性能。意義は薬性と同じ。主に穴性は腧穴自体に具わる主治作用を根拠にする。ただし腧穴の主治には双方向性の特徴が具わっているので，穴性は相対的なものにすぎない。穴性を掌握すれば随症取穴する際の根拠となる。現在，針灸界における穴性の認識はなお完全に一致しておらず，腧穴の研究が深まるにつれ，今後少しずつ整合性のあるものになっていくだろう」と解説している。

その後に出版された『針灸推拿学辞典』[4]にもまったく同じ文章が引用されていることから，この解説を現在の中国における穴性の定義の一応の目安と考えてよいだろう。ここでのポイントは，「意義は薬性と同じ」と指摘している点である。

1－2．穴性と特定穴（要穴）

前述したとおり穴性とは腧穴に具わる性能のことであるが，これとよく似た概念に「特定穴理論」がある。中国では一般に特定穴と呼んでいるが，わが国では「要穴」という。特定穴とは五輸穴や背兪穴など，経絡の属性や部位によって特定の効能を有するとされる腧穴のことであるが，穴性を論じる際にこの特定穴理論を穴性に含めるかどうかで混乱がみられており，穴性論の是非を問う際には注意が必要である。

穴性の内容を見れば，穴性理論のなかに特定穴理論が含まれていることは明白である。実際，穴性に反対を表明している学者も，特定穴理論にもとづく腧穴の効能を否定していない[6]。つまり，穴性論争で争点になっているのは，薬物の効能を真似て作った腧穴の効能である（後述）。例えば，合谷の穴性を「清熱解表・明目聡耳」，足三里の穴性を「和胃健脾・通腑化痰・昇降気機」と表現[5]することの是非である。

2．中国における穴性の歴史

2－1．穴性をはじめて提起した羅兆琚

穴性をはじめて提起したのは羅兆琚（1895～1945）である[7]。腧穴の性能は，それ以前にも「大杼・膺兪・缺盆・痛便，これら8穴は胸中の熱を瀉す」（『素問』水熱穴論），「中府穴は主に胸中の熱を泄し肺気を実す」（岳含珍『経穴解』）というように断片的に記載されているが，羅氏はそれを体系的にまとめたという点で革新的である。

羅兆琚は，広西柳州市（現在の広西チワン族自治区）の出身で，1935年に中国針灸学研究社および針灸講習所に招聘され，研究主任兼編集副主任，講習所講師・訓育処主任・針灸雑誌社編集などを歴任した。1937年に日中戦争が勃発した際に故郷（柳州）に戻り，医療活動を行いながら後進の育成に努めたとされる[8]。

羅氏は1934年の『針灸雑誌』に「実用鍼灸指要」を連載し，第4章「穴義要旨」で262の経穴を主治作用にもとづいて，気類（41穴）・血類（21穴）・虚類（34穴）・実類（46穴）・寒類（21穴）・熱類（51穴）・風類（29穴）・湿類（19穴）の8種類に分類し，さらに各穴の穴義（各穴に具わる主要な特性）を記した[8]。

彼は「実用鍼灸指要」の序で，「薬性と穴性，その意義は一つである。およそ薬剤を研究するもので，薬性に熟知していないということはないが，針灸家で穴性の研究をしているとは聞いたことがない。本篇では二六二の穴性を集め，経脈の順序どおりに並べ，詳細な説明を加えている」と述べ，薬性を意識した穴性を提起している。穴性はその誕生時から薬性を意識しながら提起されたのである。

2－2．民国期の書籍に現れた穴性

同時代には，他に1936年に李文憲（1909年～卒年不詳）が著した『鍼灸精粋』[9]や，1940年に承淡安（1899～1957）が編著した『中国鍼灸学講義』[10] [11]に穴性の記載がみられる。

李文憲は広西藤県（現在の広西チワン族自治区梧州市）の出身で，1936年に広西省容県の国医講習所に針灸科教席として招聘されている[12]。羅氏との接点は定かでないが，『鍼灸精粋』の第9章「穴性括要」は，羅氏の「穴義要旨」と同様に気・血・虚・実・寒・熱・風・湿の8種類に分類して，「穴性」の項目を設けて各穴の特性を記している。両書を比較すると，取り上げられている腧穴と穴性の内容はほぼ一致しており（**表1**），発行年からみて，李氏は羅氏の記載を引用したと考えられる。

『中国鍼灸学講義』は，承淡安が中国針灸学講習所を開設したとき，彼の代表的著作である『中国鍼灸治療学』（1931年刊）の内容をさらに拡大して，講義で使う教材として執筆編纂されたものである[13]。腧穴の効能は本書に収められている「鍼灸治療講義」中に記されている。本書の序文によると，この頃，承淡安は仕事が忙しくなったため，「経穴講義」2・3章と「鍼灸治療講義」の部分は，羅兆琚と邱茂良が分担執筆したと記されていることから，本書の穴性は羅氏が記述した可能性が高いと推察される。同書では気門・血門・寒門・熱門・虚門・実門・風門・湿門の8種に分類し，各穴の作用を記している。ただ，例えば気門の腧穴では13穴が『実用鍼灸指要』と共通しているが，19穴は同書に記載されておらず，食い違いもみられるため（**表2**）さらに詳細に検討する必要があるだろう。

表１　『実用鍼灸指要』と『鍼灸精粋』の気類の穴性比較

	実用鍼灸指要	鍼灸精粋
中府	理肺利気	理肺利気
雲門	開胸降気	開胸降気
尺沢	調肺気	調肺気
列欠	逐水利気	逐水利気
魚際	清熱利気	清熱利気
合谷	昇気・降気・行気・宣気	昇清降濁・理大腸気・宣諸気
曲池	行気	行気
肩髃	理肺舒気	理肺舒気
巨骨	開肺降逆気	開肺降逆気
気戸	利気	利気
天枢	調胃腸之気	調腸胃之気
水道	理三焦膀胱腎中熱気	理三焦膀胱腎中熱気
欠盆	開胸降気	開胸降気
三里	昇気・降気・調中気	能昇気・又能降気・調中気
陥谷	調胃気	調胃気
陰白	昇陽気	昇陽気
公孫	運脾気	運脾気
三陰交	行気降気	行気降気
大包	行胸腹中諸気	行腹中諸気
神門	除心内鬱結之気	除心鬱内結之気
攢竹	宣泄熱気	宣洩頭部熱気

	実用鍼灸指要	鍼灸精粋
天柱	理気治気乱于頭	理諸気・治頭上気
復溜	固衛気・布陰気・収腎気	固衛気・布陰気・収腎気
通谷	理五臓之乱気	理五臓之気
或中	開胸降衝気	開胸降衝気
兪府	降逆気・理腎気・清肺順気	降逆気・理腎気・清肺順気
大陵	降心気・除濁気	降心気・降濁気
労宮	清熱理気	清熱・理気
肩井	鎮肝気・降逆気	鎮肝気・降逆気
陽陵泉	行気導濁	行気導濁気
大敦	泄肝気	洩肝気
太衝	降気	降気
関元	駆腹中一切冷気	駆腹中一切冷気
気海	固元気・振陽気凡一切気疾俱以此穴為主	固元気・凡一切気疾・俱宜取此
中脘	鮮鬱気・昇清降濁・利気	鮮鬱・昇清降濁・利気
膻中	昇脾気・降胃気	昇脾気・降胃気
天突	降気	降諸気
大椎	調和衛気	調理胃気
上星	瀉諸陽熱気	瀉諸熱気
膏肓	補陽気	補陽気

表２　『実用鍼灸指要』と『中国鍼灸学講義』の気類の穴性比較

	実用鍼灸指要	中国鍼灸学講義
中府	理肺利気	理肺利気
雲門	開胸降気	開胸降気
尺沢	調肺気	
列欠	逐水利気	
魚際	清熱利気	
合谷	昇気・降気・行気・宣気	宣泄肺気之鬱結

	実用鍼灸指要	中国鍼灸学講義
曲池	行気	行気
肩髃	理肺舒気	
巨骨	開肺降逆気	
気戸	利気	
天枢	調胃腸之気	
水道	理三焦膀胱腎中熱気	

	実用鍼灸指要	中国鍼灸学講義
欠盆	開胸降気	
三里	昇気・降気・調中気	昇気・降気・調中気
陥谷	調胃気	
陰白	昇陽気	昇陽気・治嘔逆
公孫	運脾気	治脾胃之気上逆而止嘔吐
三陰交	行気降気	
大包	行胸腹中諸気	
神門	除心内鬱結之気	
攢竹	宣泄熱気	
天柱	理気治気乱于頭	
復溜	固衛気・布陰気・収腎気	
通谷	理五臓之乱気	
或中	開胸降衝気	
兪府	降逆気・理腎気・清肺順気	開肺気・治咳逆上気・嘔吐不食
大陵	降心気・除濁気	
労宮	清熱理気	
肩井	鎮肝気・降逆気	
陽陵泉	行気導濁	行気導濁
大敦	泄肝気	
太衝	降気	
関元	駆腹中一切冷気	
気海	固元気・振陽気凡一切気疾俱以此穴為主	通治一切気病・振陽気・利気
中脘	鮮鬱気・昇清降濁・利気	専理腸胃之気而助消化
膻中	昇脾気・降胃気	
天突	降気	治気上熱・咳嗽哮喘
大椎	調和衛気	調和衛気
上星	瀉諸陽熱気	

	実用鍼灸指要	中国鍼灸学講義
膏肓	補陽気	
少商		宣泄肺気
経渠		降肺気・治気逆
商陽		泄大腸之気・兼泄肺気
内庭		疏通腸胃之気
豊隆		泄瀉肺気・治哮喘
風門		駆風・治嘔逆上気・喘臥不安
肺兪		専治肺病・宣泄肺気・治咳嗽喘嘔
厥陰兪		治胸中膈気・嘔吐
肝兪		専治肝病・能泄肝気・治肝気之横逆
胆兪		泄肝胆之気上逆・治翻胃・食不下
大腸兪		能疏通腸中気化
膀胱兪		能疏通膀胱之気化而通調小便
照海		能引気下行
内関		能調肺胃之気・治嘔逆上気
足臨泣		泄肝気・治胸満気喘
建里		理中焦之気・治心痛上気・嘔逆不食
下脘		功用同上（中脘）
上脘		功用同上（中脘）
巨闕		治咳逆上気・胸満気痛

■ ２－３．穴性誕生の背景

穴性はなぜ提起されたのだろうか。その理由として，穴性が提起された民国期の時代背景や当時の針灸がおかれていた状況が関係していたことを指摘できる。

清朝末期から中国は「西学東漸」（西洋の医学が次第に東方に移り進むこと）の影響を受け始め，1929 年には余雲岫らが提出した「廃止中医案」が批准され，中医は存続の危機に直面していた（その後，全国の中医会が存続運動を展開し，1936 年に「中医条例」が公布され中医は合法的な地位を獲得する）。また，清代の 1822 年，勅令によって宮廷の太医院で針灸科が廃止されて以来，民国期に至っても中国の針灸は民間療法的に存続するのみで，伝統的な針灸は壊滅的な打撃を受けていた [14)]。

そうした時代背景のなかで，1929 年，承淡安が江蘇省無錫に「中国針灸学研究社」を創設する。通信教育・針灸講習所を立ち上げ，『針灸雑誌』（中国で最初の針灸専門雑誌）を創刊し，伝統的な針灸の復興と人材の育成に努めるのである。

つまり，穴性は人材の育成が急務であった時代に誕生したのである。伝統的に腧穴の効果は主治症で記載されてきたが，主治症の数は膨大かつ煩雑であったため，腧穴のもつ性能を把握しやすいよう，気・血・虚・実・寒・熱・風・湿に８分類したうえで，各穴の性能を「穴性」として概括したものと考えられる。その際に利用されたのが薬物の効能表記の方法である。薬性分類で先行していた薬物学・方剤学の方法を援用した可能性が考えられるが，詳細については別途検討したい。

また，古典に現れる腧穴の分類方法は，主に①部位別，②所属経脈別の分類であるが，穴性は腧穴を性能別に分類するというまったく新しい方法として提起された点でも画期的といえるだろう。

■ ２－４．新中国成立後の穴性

新中国成立後，穴性の記載は 1962 年に上海中医学院が編纂した『針灸学（二）腧穴学』[15)] においてはじめて認められる（153 穴に穴性が記される）。本書は，1960 年に上海中医学院に創設された中国で最初の針灸学部で使用する教材である。1962 ～ 65 年にかけて「（一）経絡学説」「（二）腧穴学」「（三）刺灸法」「（四）治療学」の４分冊で出版された。ここでは，羅氏のように８分類する方法ではなく，経絡別に分類した各経穴欄で「位置・解剖・穴性・主治・配伍・操作」の１項目として取り上げられている。以降の穴性はおよそ同様の方法で記載されていく。

上海中医学院では 1959 年に『針灸学概要』[16)]，1960 年に『針灸学講義』[17)] という本科で使用する針灸教材を作っているが，いずれにも穴性は記載されていない。

次に穴性が記載されるのは，1974 年に出版された上海中医学院の『針灸学』[18)] である。本書は上記の『針灸学』シリーズを合本･改訂したもので，「効能」（初版では「穴性」と表記）の項目が設けられている。ただし，その内容は，例えば合谷の場合，発表解熱・疏散風邪・清泄肺気・通降腸胃とあった穴性が，疏風・解表・鎮痛・通絡に変更されており，記載は一致していない。なお，本書は 1977 年に刊々堂出版社から翻訳出版されている [19)] ため，日本に穴性を紹介した本としても重要である。

２－５．1980 年代以降急増する穴性記載の書籍

1982 年，その後の中医学の発展を決定付ける重要な出来事が起こる。「全国中医医院と高等中医教育工作会議」（衡陽会議）である。ここでは，西洋医学化した中医学の教育と臨床から中医を復興させる措置が打ち出され，「西医・中医・中西医の３つを共に発展させる」方針が示された。これ以降，中医は急速に発展し始める。

この流れと歩調を合わせるように，穴性を記載した本も急増する。1980 年代に出版された主な書籍[20)～28)]を表３に示す。

表３　1980 年代に発行された穴性の記載された主な書籍

編著者	書名
天津中医学院	実用針灸学[20)]
天津中医学院	腧穴学（針灸学部試用教材）[21)]
北京中医医院	金針王楽亭[22)]
李世珍	常用腧穴臨床発揮[23)]
孫震寰・高立山	鍼灸心悟[24)]
楊子雨	針灸腧穴手冊[25)]
鄭魁山	針灸集錦[26)]
楊甲三	針灸学（高等中医院校教学参考叢書）[27)]
楊甲三	針灸腧穴学[28)]

ただ，同時期に出版された第５版「統一教材」[29)]になぜ穴性が記載されなかったのかは疑問が残る。穴性が上海と天津の両中医学院で採用されただけで，一般化し得ていなかった証左ともいえるが，さらに掘り下げて検討する必要があるだろう。

日本への影響では，天津中医学院の『腧穴学』[21)]と李世珍の『常用腧穴臨床発揮』[23)]が重要である。なぜなら『腧穴学』の「功能」の内容が，1986 年に東洋学術出版社から発行された『針灸経穴辞典』の「作用」に採録されているからである[30)]。

また，『常用腧穴臨床発揮』も同様に同社が『臨床経穴学』[31)]として 1995 年に翻訳出版しており，「功能」（翻訳本では効能）の項目で穴性を記載している。本書は，腧穴の効能と薬物の効能の置き換えをはかったり，穴性の内容を補瀉手技と関連付けて明記するなど，他の書にはみられない独自の穴性論を展開しており，穴性を極限にまで発展させたといえるかも知れない。ただし，それに対する批判もある[7)32)]。

中国においては，『金針王楽亭』[22)]と『鍼灸心悟』[24)]が重要である。『金針王楽亭』では「穴性配穴」の章を設け，「分門取穴」表を付して腧穴の「功能」を記している。ここで採用されている腧穴は『実用鍼灸指要』『鍼灸精粋』とほぼ一致しており，穴性の記載も類似しているため，両書のいずれか（あるいは両方）の影響が強く推察される。なお，本書の「穴性配穴」の部分は前述の『針灸経穴辞典』[30)]の付録として収録されている。

『鍼灸心悟』には「穴性賦」が収録されており，原文と直訳を記載するほか，孫氏の詳細な注釈が加えられている。「穴性賦」は常用 106 穴を羅氏と同じ 8 類に分けて，歌賦形式で記述したものである。制作年代は不詳であるが，孫氏は「20 年以上前に北京中医学院にいたときに『経穴性賦』を収集した」[24] と記していることから，1965 年以前には存在したと思われる。また，採用されている腧穴は『中国鍼灸学講義』とほぼ一致し，穴性の内容も酷似していることから，同書との関連が強く示唆される。

以上のように 1980 年以降，穴性を記した書籍が急増するが，各書籍で穴性の内容は異なっている（**表 4**）。こうした不一致は編著者の経験や依拠した資料の違いからきたものと考えられるが，学習者を混乱させていることは否めない。穴性を混乱させている要因にもなっており，今後はある程度の統一化をはかることも必要であろう。

表 4　合谷の穴性比較

編著者	書名	穴性
李文憲	鍼灸精粋[9]	昇清降濁・理大腸気・宣諸気・清気分及頭面諸竅之熱
承淡安	中国鍼灸学講義[10]	宣泄肺気之鬱結・治牙衄・清気分及頭面諸竅之熱・解表・去風寒
上海中医学院	針灸学（二）腧穴学[15]	発表解熱・疏散風邪・清泄肺気・通降腸胃
上海中医学院	針灸学[18]	疏風・解表・鎮痛・通絡
天津中医学院	実用針灸学[20]	疏風清熱・消炎止痛・醒脳開竅・通調気血
天津中医学院	腧穴学（試用教材）[21]	鎮痛安神・通経活絡・疏風解表
北京中医医院	金針王楽亭[22]	昇気・降気・行気・宣気・清気分熱及頭面諸竅熱
李世珍	常用腧穴臨床発揮[23]	疏風解表・清熱宣肺・清気分熱邪・通関啓閉・開竅醒志・宣陽明経気・舒筋活絡・補気固表・益気固脱・益気昇陽・益気摂血・行血・生血・壮筋補虚
孫震寰	鍼灸心悟[24]	泄肺気之鬱結・治牙衄・清気分及清頭面諸竅熱・解表去風寒
鄭魁山	針灸集錦[26]	清瀉陽明・疏風鎮痛・通経開竅
楊甲三	針灸学[27]	清熱解表・明目聡耳

3．中国における穴性論争

3－1．穴性の意義

1980 年代以降，穴性は一般化してくるが，これは穴性に価値があったからにほかならない。孫震寰は「穴性は薬性に喩えられる。薬性を知らずに処方して，どうして寒熱虚実を調整できるのか。針灸においても穴性がわからずに，どうし

て諸病の病機を把握できるのか」[24] と述べ，また李世珍は「もし機械的に先人の経験を運用したり，某穴が某病を治すとか，某病にはどの穴を配穴するといった処方を丸暗記して，教条的に選穴や配穴を行えば，その治療は源のない水・根のない木となってしまうであろう。そうした治療法では臨床に際して制約をうけてしまうし，とりわけ複雑な病証に遭遇したり，なかなか治療効果があがらない病証に対しては，往々にして策がなくなってしまう。また治療に際しても正確に取穴することはできないし，治証も明らかでなくなり，病の軽重についても，その根拠を問うことができなくなる」[23] と述べ，両者とも穴性の意義を強調している。しかし 1990 年代以降，穴性を否定するような見解が散見されるようになる。

３－２．穴性肯定論

ここからは，中国の雑誌文献を猟歩して，穴性に対する動向を追ってみる。

穴性論争の大きな流れを**図 1** に示す。まず書籍の出版と合わせるように，1980 年代から穴性の特徴や意義を概説した論文が散見されるようになるが，1990 年代になると王宏才 [33] や徐斌 [34] らが，腧穴の効能に薬能モデルを応用することに反対を表明する。その他にも，凌宗元 [35] や黄龍祥 [36] らも穴性を否定する見解を示す。

一方で，2008 年になると王軍 [37] が徐斌 [34] の見解に反論し，薬性と穴性には共通性が多いと述べる。その後，賛成・否定が散見されるが，2010 年の李仲平 [38] は中薬効能の単純な置き換えは混乱を招くとしながら，中薬と腧穴の相違点と共通点を分析している。

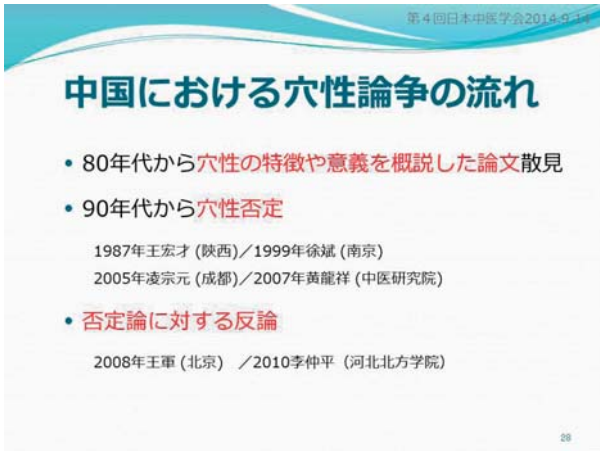

図 1　中国における穴性論争の流れ

穴性に対して肯定的な論文としては，1979 年の牟敬周 [39]，1984 年の張慰民 [40]，1985 年の許英章 [41]，1995 年の王暁蘭 [42]，1996 年の李志道 [43]，1996 年の張登部 [44]，1999 年の劉伍立 [45]，1999 年の葛林宝 [46]，1999 年の呉其康 [47] などがある。

例えば，張慰民 [40] は「穴性は薬性と同様に重要な意義がある」と述べ，腧穴のもつ性質を明らかにしながら，穴性の特徴と意義を強調している。また，腧穴の主治には共通する性質（経絡と腧穴の分布にもとづく効能）と特異的な性質（その腧穴に特異的に存在する効能）がある。腧穴には双方向性の作用がある。操作

手法，刺激の時機，患者の抵抗力，刺針深度などで効果が左右されるので，腧穴を固定化せず柔軟に使うよう述べている。さらに，配穴するうえでも穴性を熟知することが大切であることを強調している。

また，許英章[41]は主治病症から穴性を帰納する試みを展開しており，主治病症を根拠に腧穴の性能を概括できると主張している（図２）。

合谷の主治病症	・傷風感冒 ・頭痛身疼 ・発熱悪寒 ・無汗多汗 ・咳嗽喘気 ・咽喉腫痛 ・痄腮面腫	・高熱痙厥 ・牙痛齦腫 ・目赤腫痛 ・鼻衄鼻淵 ・聤耳耳聾	・中風偏癱 ・口眼歪斜 ・牙噤不記 ・難産滞産 ・腕指睛痛
合谷の性能	祛風解表	清熱瀉火	理気通絡止痛

図２　合谷の主治病症から穴性を総括[41]

３－３．穴性否定論

３－３－１．穴性の何が問題か

王宏才[33]は中薬の効能をモデルにした穴性の問題点を指摘している。①効果は，刺針手法・患者の状態に左右されるうえ，腧穴には双方向性の調節作用があるので，腧穴の効能を的確に概括できない。②針灸における弁証は選穴を指導するものではなく，刺針手法を選択するためのものである。③自己の経験にもとづいて穴性を規定したため混乱している，といった点を指摘している。

徐斌[34]は，薬の作用は固定化できるが，腧穴は病性・病状・配穴・針灸の方法など状況に応じて変化するため，薬のように性能を規定することは難しいと述べる。

凌宗元[35]は，中薬は偏性，腧穴は双方向性の作用を利用する点で本質的に異なっているうえ，針灸は寒熱虚実の証候の処理方法が異なると述べる。また，腧穴には双方向性の作用があるため，薬性の表現方法では一面的であると指摘する。さらに，①歴代の針灸医籍では，腧穴は中薬効能の表現法で記載してこなかった。②針灸治療の原理では部位が強調されてきた。③選穴の原則は「経絡の過ぎるところ」「穴位のあるところ」である。④腧穴の治療作用は，近治作用・遠治作用・特殊作用によって表現。⑤穴性には共通性と個性があり，近治作用と遠治作用は腧穴の共通性，特殊作用が腧穴の個性。⑥薬性と穴性は完全に同じでないため，中薬の効能表現によって腧穴の作用を普遍化できない。⑦腧穴の作用には自身に具わった法則があり，それは中薬の作用と完全に同じものではないと強調する。

黄龍祥[36]は，腧穴には中薬における「五味」「四気」に相当する属性はなく，あるのは特定の部位の症状に対する主治のみであるとしたうえで，中薬の効能に相当する針灸の効能がなければ，方解の根拠を失い弁証論治は確立できなくなると指摘する。

3－3－2．穴性をどう表記すべきか

穴性を否定する論者は，穴性をどう表記すべきかについても言及している。

王宏才[33]は，古人は腧穴の効果を主治病症で表現してきたが，これでは煩雑であるため概括する必要がある。ただし，その方法は中薬効能をモデルとせず，刺針手法と刺針の特徴とを結びつけた方法で確立すべきであるとしている。

徐斌[34]は，穴性は主治作用や薬性をモデルとする方法ではなく，腧穴の特性を全面的に考察することで確立しなければならないという見解を示す。さらに，腧穴には相対的な性質（病性・病状・配穴・針灸の方法等の諸要素と関連する性質）と絶対的な性質（位置，経絡臓腑の属性）の２つの要素があり，穴性はこの２つの分析を通じて決定しなければならないと指摘する。

黄龍祥[36]は，腧穴の主治を端的に表現することで複雑な内容をわかりやすくする必要があるが，中薬の効能方式をコピーせず，特定の部位＋特定の症状で主治を表現することを提案している。

3－4．穴性否定論に対する反論

一方，穴性否定論に対する反論も現れており，王軍[37]は，徐斌[34]への反論を展開している。薬性と穴性に共通性は多いと述べ，徐斌がさまざまな要素の影響を受けるため腧穴の効能は固定化できないと述べた点についても，①昇降浮沈は腧穴にもある，②寒熱温涼は中薬より効果がある，③五味に対して針感がある，④帰経に対して穴は経絡に帰属，⑤毒性に対しては不良反応，⑥中薬の効能と同じように腧穴には効能があると述べている。

李仲平[38]は，中薬効能との単純な置き換えは混乱を招くとしながらも，薬性と穴性には相違点と関連性があると述べる。①中薬も針灸も八綱弁証は必要。②腧穴と中薬は人体への治療作用が似ている。③腧穴には四気五味にあたる性能はないが，各種刺針手法によって腧穴の治療性能を生み出せる。④多くの腧穴の主治は効能と操作手法によって効果を発揮することができる。例えば焼山火は寒を除き，透天涼は熱を冷まし，置針多灸は温め，浅刺で速抜か出血させれば冷ます。補法・瀉法・平補平瀉法等の手法は行気・導気の過程で補虚瀉実・温経散寒・昇清降濁などの祛邪除疾の作用があると述べる。

結語

以上，中国で発行されている書籍や雑誌を通して，穴性の定義，中国における穴性の歴史，中国で繰りひろげられる穴性論争について見てきた。

穴性論争の争点は，腧穴の効能を薬能をモデルに表記することが果たして妥当であるか，という点にあった。そして，穴性を否定する見解には，中薬と針灸には以下のような相違点があることが指摘されていた。

①中薬は偏性を利用し，腧穴は双方向性を利用して治療するという違いがある。

②針灸と中薬とでは寒熱・虚実の証候に対する処理が異なっている（薬はそれ自体に具わるが，腧穴は手法で効果を発揮する）。

③中薬は単一方向の作用であるが，腧穴は双方向性の作用がある。

④腧穴は操作手法，刺激の時機，患者の抵抗力，刺針深度などで効果が異なるため，中薬のように効能を固定化できない。

民国時代，穴性は教育上の必要性から誕生したように，腧穴の効能を表記することは現代においても教育上有用であり，臨床上も選穴・配穴に際して役立つことであろう。今後は以上に示したような問題点をどう克服して，腧穴の効能を表記すればよいのかを検討していく必要がある。針灸の弁証論治を考えるうえでも，穴性の問題は重要である。専門家の間での活発な討論・研究を期待したい。

【引用文献】

1）高忻洙主編：実用針灸学詞典．江蘇科学技術出版社，1996
2）南京中医学院針灸教研組編：針灸学講義．人民衛生出版社，1961
3）梁繁荣・趙吉平主編：針灸学．人民衛生出版社，2012
4）梁繁荣主編：針灸推拿学辞典．人民衛生出版社，2006
5）楊甲三：針灸学．人民衛生出版社，1989
6）趙京生：穴の研究は針灸の特性にもとづいて．中医臨床 34（3）：120-124，2013
7）譚源生：民国時期針灸学之演変．中国中医科学院，北京，2006（中国中医科学院 2003 級修士研究生学位論文）
8）林怡：羅兆琚《実用針灸指要》述要．広西中医薬 28（2）：38-39，2005
9）李文憲：鍼灸精粋．中華書局，上海，1937
10）承淡安編著：中国鍼灸学講義．中国針灸学研究社，1940
11）張如青ほか主編：近代国医名家珍蔵伝薪講稿・針灸類．上海科学技術出版社，2013
12）陳暁林ほか：李文憲及其《針灸精粋》．中国針灸 31（2）：2011
13）肖少卿主編：中国針灸学史．寧夏人民出版社，1997
14）真柳誠：現代中医針灸学の形成に与えた日本の貢献．全日本針灸学会雑誌 56（4）：605-615，2006
15）上海中医学院：針灸学（二）腧穴学．人民衛生出版社，1962
16）上海中医学院：針灸学概要．人民衛生出版社，1959
17）上海中医学院：針灸学講義．上海科学技術出版社，1960
18）上海中医学院編：針灸学．人民衛生出版社，1974
19）上海中医学院編・井垣清明ほか訳：針灸学．刊々堂出版社，1977
20）天津中医学院：実用針灸学．天津科学技術出版社，1981
21）天津中医学院：腧穴学（針灸学部試用教材）．天津中医学院，1983
22）北京中医医院：金針王楽亭．北京出版社，1984
23）李世珍：常用腧穴臨床発揮．人民衛生出版社，1985
24）孫震寰・高立山：鍼灸心悟．人民衛生出版社，1985
25）楊子雨：針灸腧穴手冊．山西科学教育出版社，1986
26）鄭魁山：針灸集錦．甘粛科学技術出版社，1988
27）楊甲三：針灸学（高等中医院校教学参考叢書）．人民衛生出版社，1989
28）楊甲三：針灸腧穴学．上海科学技術出版社，1989
29）邱茂良主編：針灸学．上海科学技術出版社，1985
30）山西医学院李丁・天津中医学院編・浅川要ほか訳：針灸経穴辞典．東洋学術出版社，1986
31）李世珍著・兵頭明訳：臨床経穴学．東洋学術出版社，1995
32）李鼎：鍼灸教材の変遷と弁証論治の鍼．中医臨床 35（2）：120-127，2014
33）王宏才：対伝統腧穴功効之我見．陝西中医 8（6）：271-272，1987
34）徐斌：穴性論．中国針灸（1）：29-31，1999
35）凌宗元：腧穴穴性理論探討．中国針灸 25（2）：131-132，2005
36）黄龍祥：腧穴主治的規範化表述．中国針灸（11）：823-827，2007

37）王軍ほか：穴性小窺　従中薬的性能看腧穴的性能．針刺研究 33（4）：280-283，2008
38）李仲平：浅析腧穴之穴性与中薬の薬性．四川中医 28（1）：113-114，2010
39）牟敬周：穴性初探．河南中医学院学報（4）：1-4，1979
40）張慰民：浅談穴性．上海針灸雑誌（3）：45-46，1984
41）許英章：針灸穴位的性能与分類．福建中医薬：45-46，1985
42）王暁蘭：腧穴功用探析．中国針灸（3）：49-51，1995
43）李志道ほか：応該加強腧穴功能的研究．針灸臨床雑誌 12（4）：7-8，1996
44）張登部ほか：浅談穴性．山東中医学院学報 20（4）：237-238，1996
45）劉伍立ほか：弁証選穴与腧穴的功能帰類与分化．針灸臨床雑誌 15（1）：1-3，1999
46）葛林宝ほか：穴位，中薬功効相似析．上海針灸雑誌 18（6）：29，1999
47）呉其康：論“穴性”．針灸臨床雑誌 15（2）：1-4，1999